

# グループワークにおける情報保障に必要な環境調整 ～周囲の学生の視点から～

日本社会事業大学 向坂仁奈

## 1. 背景と目的

**背景** 大学の講義でグループワークの導入が増加中



グループワークは複数の学生が話者になる



情報保障だけでなく**周囲の学生の理解や環境調整が必要**

### 目的

手話通訳、PCテイク、GooglePixelの音声認識による自動文字起こし(以下Pixel)それぞれで、どのような環境調整が必要になるか考えたい。

## 2. 方法

- ①ろう学生(Aさん)が受講した講義の観察
- ②①の講義を受講した聴学生(13名)へのアンケート調査
- ③Aさんへのインタビュー調査(今後実施予定)

### 各情報保障の様子イメージ



手話通訳



PCテイク



Pixel

## 3. ◆結果 ➡考察 (1)情報保障は「空気」であるべきか？

- ◆発言が文字として残ることに緊張を感じる学生はいたが少数。
- ◆自身の発言がPCテイクに入るか、Pixelに正しく認識されたか気になった学生は各8、7名。
- ➡聴学生も**情報保障の必要性を理解している**と考えられる。
- ◆Pixelについては「誤変換や誤認識を直したい」を選択した学生が7名と、調査対象の半数。
- ◆どの情報保障でも、「あまり意識しなかった」を選んだ学生は各1名ずつと少数。
- ➡**情報保障は気になる存在**であると同時に、**その重要性を啓発する存在**でもあるのでは。

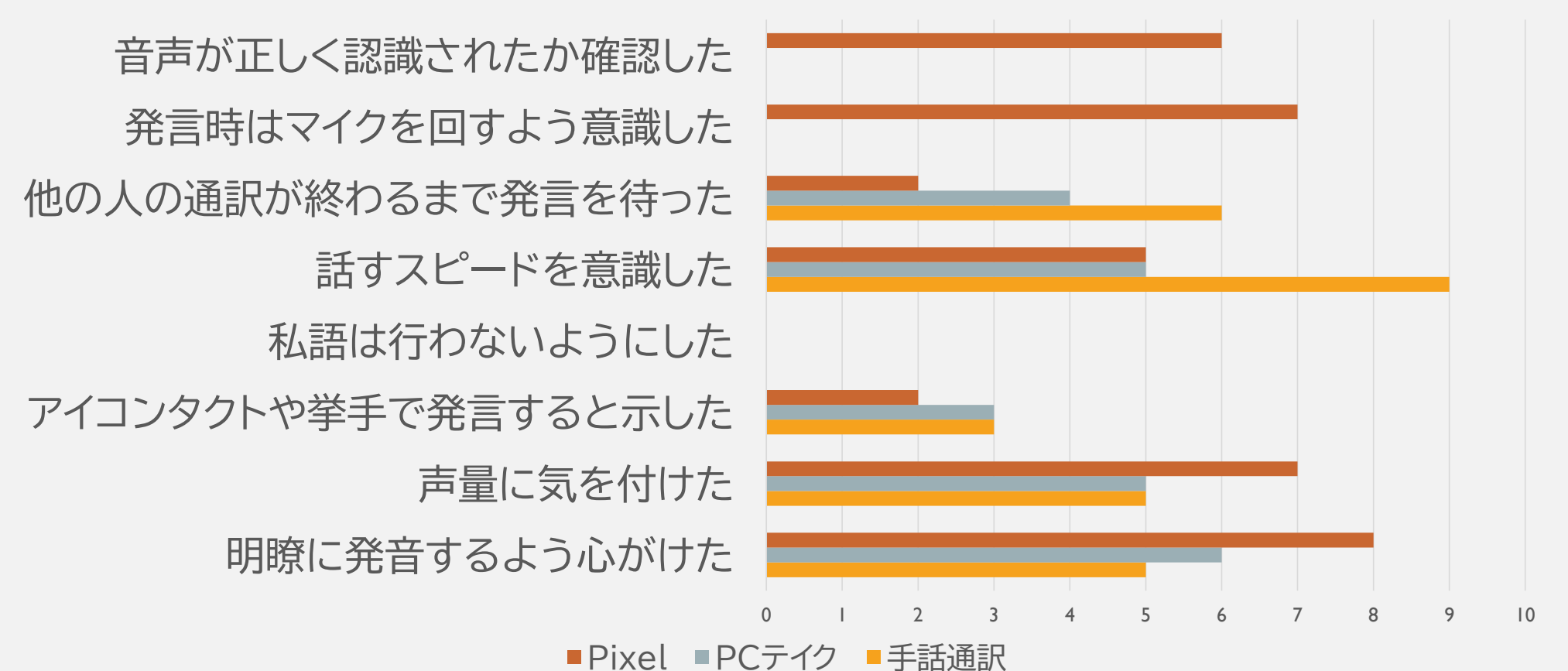
## 3. ◆結果 ➡考察 (2)情報保障が聴学生に与える安心感

- ◆各情報保障があった時に、どのような気持ちになったかを尋ねた設問で、聴学生に安心感を与えているのは、手話通訳>Pixel>PCテイクの順。
- ➡その要因として以下が考えられる。
- ➡手話通訳や、文字起こしされている画面が見やすいPixelは、聴学生にとっても**通訳が行われていると一目でわかるため安心**。
- ➡対象の大学の学生は、PCテイクに比べて手話通訳やPixelの方が**使い慣れている**。
- ➡手話通訳者が**毎週固定**で、雑談できる話しやすい人物だった。

## 3. ◆結果 ➡考察 (3)情報保障が会話の流れに与える影響

- ◆僅差ではあるが、会話の流れやテンポに影響を与えた順が、手話通訳>Pixel>PCテイクであった。➡これは周囲の学生にとって意識されやすい情報保障の順でもあるのでは。
- ◆半数の学生が「手話通訳をよく見ていた」と回答。
- ➡**手話への関心が高い**学生に、手話通訳は意識されやすかった。
- ➡Pixelは**マイクが目に入りやすい**ため、意識もされやすい。
- ➡一方PCテイクは、文字起こしされた画面が周囲の学生には見えにくい、PCテイクと目線を合わせない、PCが壁となり空間を分けているなどが理由で、意識されにくいのでは。

## 3. ◆結果 ➡考察 (4)どのような話し方を意識したか



## 3. ◆結果 ➡考察 (5)聴学生が普段の話し方と変えて工夫した点

- ◆Pixelは、明瞭な発音と声量が最も意識された。マイクを回すよう意識した学生は7名、音声为正しく認識されたか確認した学生は6名。
- ◆話すスピードを意識した学生、他の人の通訳が終わるまで自身の発言を待った学生が最も多かったのは手話通訳。
- ➡**通訳するのが人であり、通訳が終わったかどうか分かりやすいためか。**
- ◆PCテイクは他2つと比べ、話し方を工夫したと回答した学生が少なかった。
- ➡前述の通り、PCテイクは聴学生の意識に上りにくいためか。

- ◆挙手やアイコンタクトで、今から自分が発言すると示した学生は比較的少ない。➡**話者が誰か**という情報も重要なため、**今後啓発の必要**があるだろう。

## 4. 今後に向けて

- ・本研究では今後、Aさんに手話通訳をつけインタビューを行い、講義の観察結果とアンケート結果と合わせて分析と考察を行う。
- ・グループワークで情報保障が十分に機能するためには、聴学生の話し方の工夫が必要。本ポスター発表における考察では、**情報保障自体が理解と啓発を促す存在**となることが示唆された。今後、「目立たない情報保障」を目指すのではなく、聴学生の意識が情報保障に向きやすい環境調整の提案を目指したい。